全体討論

パネラー：葉　　國良
　　権　　悳永
　　王　　建新
　　大平　聡
司　　会：矢野　建一

矢野：それでは討論に入りたいと思います。ご質問は大変多岐に亘っております。あえて整理をいたしますと、王先生や葉先生のお話にも関わってくる日本という国号に関する質問が多くございます。『旧唐書』の中に日本はもと小国というような文言が出てきておりますが、そのあたりをどのように解釈したらよろしいでしょうかといったところでございます。葉先生よろしくお願いします。

葉：唐王朝の頃の当時、日本から大勢の遣唐使節や留学僧が来られたことと思います。それに対して我が中国から日本に来た人間達は非常に少なかったと思います。ですから、こういった小国というような記載に関してあまり気になさらない方がいい。なぜならば中国人は当時、日本のことをまったく理解していなかった可能性があるからです。ですから、あまりお気になさらないように。当時の中国は自国以外の国を大抵小国と考えています。

矢野：はい、そんなところでよろしゅうございましょうか。それからもう一つ、権先生へのご質問。新羅の留学生はすべて儒学生で、儒教を学びに行ったのではないか。その他の雑学徒は認められなかったのではないか、というご質問なのか意見なのかというところでございますが、いかがでしょうか。

権：まず、お答えをする前に一つ補足したいことがあります。私の発表では遣唐使という用語を使いました。そこに言葉の誤解があったかもしれないのですけれども、私が使った遣唐使というのは新羅から中国に行った遣唐使のことです。私は遣唐使という用語を固有名詞とは思いません。普通名詞として考えております。新羅から行くと新羅の遣唐使、日本から行くと日本の遣唐使というように考えております。私は1996年に新羅遣唐使の論文で博士の学位を取りました。その論文を出すきっかけになったのは、西洋の歴史学界では遣唐使という用語を使うと、みんな日本からの遣唐使という意味で受け取られていたことです。百科事典でも遣唐使を調べてみますと、日本から中国に送った使節団というふうに書いてあります。そこから刺激を受けて新羅遣唐使とい

う内容で論文を書くようになりました。話が長くなりますが、先程の質問に対するお答えをします。今まで知られている遣唐使関連の史料を調べてみますと、その出身者は王族、または貴族階級の人々がその全部を占めております。こういった史料に基づく限り、王族貴族でしたからこの時の留学生達はほとんど儒学を学んでいたと考えられます。勿論、雑学を学んだという史料は残されていません。でも、私は雑学もあったと思っております。

矢野：はい、もう一件これと関連しているんですが、今日のこのシンポジウムそのものもですね、留学生と言ったり遣唐使と言ったりしてますけれども、必ずしも日本から中国への遣唐使とか留学生とかを考えているわけではないわけであって、東アジア世界の中での人と物の行き来といったところが非常に大きな課題になっているわけですね。その中でやはりあの権先生の西学運動との関わりで９世紀における西学運動の現れと外来品への羨望の風潮、いわゆる唐物の高まりがなぜこの時期となっているのか、ちょっと教えていただければとの質問が出ています。今の西学の現れと外来品種、唐物に関する関心がなぜこの時期に高まるかというご質問です。

権：今日のレジュメに書きましたけれども、９世紀になりますと新羅の王権が非常に弱くなります。それ以前までは平和が長続きしてまして、緊張感がみな解けてしまいます。もう一つは当時、８世紀、９世紀になりますと、唐の文化が満開します。そういう理由があったのではないかと思います。

矢野：はい、それからやはり議論の中で多いご質問というのは、今度は王先生のほうで、問題提起をこの報告の中でされました。世界に開かれた帝国、その理由といったところで、唐王朝は外国人に対して中国化するために、歴史書をたくさん欲したり、或いは学者を集めて、つまり唐王朝が広く開いていたというよりも、そうした意見を自由に出させることによってより高度に対応したというか、或いは懐柔したのではないか。そういう意見が出てますが、それに対して王先生いかがでしょう。

王：ちょっと質問が理解できなかったので、もうちょっと。

矢野：結論から申しますと、当時の唐王朝、各国に開かれている、留学生達に対しても、或いは滅亡した部族だとかそういった者たちを唐側で抱えこむ時も対等で開かれた形を取っているその理由について、それは唐王朝ではたくさんインテリとかですね、それから学者達を優先的に集めていくと、そういった考え方があったからではないか、そうすることによって唐王朝をより発展させよう、というような狙い目が主たるものではなかったかというご意見なのですがいかがでしょうか。

王：はい、先程申し上げましたように唐王朝のはじめ、外国人に対する政策を作ることにおいては、太宗の考え方は非常に大きな役割を果たしました。それは勿論、唐王朝を経済的に政治的に

強くするということが根本的な目的であることは間違いない。しかし、それでも外国人に対するそのような態度や政策は、簡単にその目的だけでは説明できないと思います。やはり、いろいろな立場や角度からこの問題についてもうちょっと力を入れて考えなければなりません。このことは中国の歴史上では非常に異例なことだと思っています。太宗皇帝にはじまり後の皇帝、特に高宗、則天武后の時代、玄宗時代までもこのような政策を採用する根本的な理由としては、基礎としては自信があるからです。外国人、外来の文化に対しても、親しみというような政策が出来るのは、それは思想ですね。現在の我々に対しても、非常に意味があるのは、一切の外国人や異族の人に対しても民族とか国籍とか関係なく、人間として考えることは非常に重要なことです。中国の歴史上でもよく文献の中には見られますね。人間の顔をしても、獣の心とか、自分の民族の人じゃなければ心も違う、異なっているという考え方が多かったのです。最後の王朝の清までそのような考え方も多かったです。唐の始め頃も、先程申し上げたように、太宗はそう考えていますが、多くの大臣はやはりその伝統的な考え方でその問題を論争します。結局、太宗の意見が、勿論皇帝ですから政策となりました。しかし、他の意見を支持している大臣もいました。ですから、この点については単純に一つのことではなく、いろいろな面からもうちょっと深く研究して、特に今の世界、現在の我々に対しても、非常に意味があることだと思います。

矢野：はい、それからですね、これは大平先生へのご質問が割と多いのですが、ただ、今日、ご報告いただいた内容よりも、仏教の経典の中身とか種類とかいったところに大分ご質問が多うございます。大変申し訳ないのですが、そのあたりは割愛をさせていただきたいと思います。ただ一つ出ておりますのは、吉備真備の大宰府への左降、これ左降ということになっておりますけれども、いや、そうではなくてこの意見ですと、西の方の守りにむしろつけたのではないか、こういうご意見が出ておりますがそのあたり。

大平：私は吉備真備は大宰の大弐に就任したことにより、左降が解かれたという考え方です。ですからそこは慎重に西海道への左降と申し上げたのです。それは国司への任命を指したもので、大宰の大弐に任命された段階で、基本的に左降が解かれたのだと思います。勿論、大宰の大弐に任命されたのは彼の兵学的知識が利用されようとしたからだと思います。始めから兵学的知識を利用するために大宰府に置くのだったら、何で筑前国、肥前国の国司に任命されなければならなかったのかということが説明されなければならない。国司任命は左降だったということだと思います。ついでに言うと藤原広嗣も私は左降だと思っていないのです。ですから質問された方と基本的には同じ考えです。

矢野：はい、ありがとうございました。いろんなご意見が出てまして、まったく逆のご意見も出ていて、左降、なぜ左降なのかというご質問もあるのですが、これはご報告の中でも説明をされていたところですので割愛をさせていただきたいと思います。それからもう一つですね、これは本日のテーマ全体に関わってくるところかなと思うのですが、これは日本の留学生みたいな方、或いは新羅の遣使の問題にも関わってくるのですが、例えば新羅とか日本のようなところでは、

いわゆる中国的な中華思想と同じようなことはなかったのでしょうか、こういったご質問でございます。まず、権先生よろしくお願いします。新羅にも中国のようなミニチュアかもしれませんけれども、中華思想的なものはなかったのかというご質問でございます。

権：私は新羅と高句麗の場合、7世紀、8世紀までは健全な対唐関係だったと思います。それは、8世紀まではそれなりに新羅も高句麗もその国なりに独自の天下に対する観念を持っていたと思ってます。ただ、私が調べてみたところによりますと、9世紀に入ってからは、それまで健全であった天下観念がなくなりつつあったと思います。長い平和の時期があったので、そのせいで緊張感が解かれてしまったのではないか、それが原因ではなかったかと思います。

矢野：はい、ありがとうございました。多くの方、ご質問というよりは、その問題に関連してのご意見を述べているケースが大変多うございまして、これはここで対論を行いますと果てしないことになってまいりますので、ご報告いただいた文脈のところでのご質問ということに限らせていただきました。それで最後に一つだけ、もう一つそうしたご報告のポイントに関わるところでは、王先生に、ソクドとか匈奴、いろいろなそうした異民族っていうのですかね、これを唐王朝が包含していって軍人として重く用いたけれども、阿倍仲麻呂のようにどちらかというと軍人ではなく文人のほうで重く用いているケースがあると、そういう阿倍仲麻呂のようなケースは中国では珍しかったのかどうかお教えいただきたい、というようなご質問が出てますが、いかがでしょうか。

王：そうですね。先程少し紹介した文献に記録している人達はほとんど軍人ですね。阿倍仲麻呂を除いて。実はよく調べてみると、文人も少なくないのです。ただ、高官は少ないですね。その文人では、新羅の文人だとか、日本とか他の国の文人で、技術者としては少なくないですね。宗教的に活躍した人も少なくない。仲麻呂は本当によく当時の中国人の中でも知られてる人ですから、また、文人として地方の長官、安南都護府で地方長官となって、実力を持っていた。印象的にはまだ仲麻呂の他にもいると思いますよ。ちょっと今、手元の史料にはないのですが、絶対軍人だけではないと思います。ただし、突厥人とか、先程例として挙げた他の百済人とか、高句麗人とか、その時代の有名な将軍になった人がいました。その唐の王朝に対して、軍事上でも大きな戦果を出した人です。ですから、本当に唐の自国の人、いわゆる漢民族の人より優れた人、有名な人になりました。それは報告の中で例として挙げました。唐の社会生活の中では、外国人が各方面でいろいろな役割を果たしていたということは、文献上にもよく記録してますし、考古学資料からもよく見られます。外国人の唐王朝での文化的な役割については、私も勉強不足ですから、肝心な答えはできないのですが、これからさらに深くその点を研究して、みなさんと一緒に、井真成のことについても、全般的にその歴史の背景を考えながら、またなにか解明できることができると思います。ありがとうございます。

矢野：ありがとうございました。報告者ではないんですけれども、中国の文学に詳しい松原先生、

そういう世界での中国人以外の存在とか活躍、もしご紹介いただけたら、ご質問の中にもございましたのでお願いできればと思います。

松原　朗（以下、松原）：これはまだ定説になっていないのですが、実は、杜甫と並び称される李白ですね。李白が非漢民族であった可能性が極めて高いといわれています。それでは、なぜ李白の李という中国人みたいな苗字があるのかということなのですが、要するに中央アジアの方で、李白のお父さんが、多分財を成して中国内部の方に引っ越して来て、中国で一番通りのいい苗字、今でも李という苗字が一番多いのですが、しかもその当時は、唐の皇族が李という苗字ですので、とりあえず通りもいいし羽振りもよさそうだというので、李と多分名乗ったんじゃないかと。李白のお父さんが李客。これ李白が晩年死ぬ時にですね、自分のことを言い残して、それを元に李白の原史料が出来るんですが、父さんのことを李客というふうに言い伝えているのですね。これありえないことです。客っていうのはお客さんっていう意味じゃなくてよそ者という意味です。「李よそもの」。お父さんの名前を客としか言えなかったということはですね、これはやっぱり、李白が狭い意味での中国人の漢民族ではなくて、西アジアの方から移り住んできた人であるとの大きな証拠ではないのか、いろいろここらは難しい議論は含んでるんですが、多分客観的に見ると李白は、非漢民族である、むしろ非漢民族である人が、杜甫と並ぶ中国最大の文学者になったということこそ、もし中国側が誇るとすればですね、そのような包容力を持ったということを中国は誇るべきだと思うのですが、実は中国人に李白は中国人じゃない、漢民族じゃないというと嫌がるのですね。松尾芭蕉が日本人じゃないって言われたような気がした、するというのと同じだと思うのですけど。ただおもしろいのは、阿倍仲麻呂が日本に帰る途中で、難破して死んでしまったっていう誤情報が伝わった時に、李白が阿倍仲麻呂の死を悼む詩を作っていますけれども、もしそうだとすると、非漢民族の高官の死を、非漢民族の詩人が悲しんだという非常におもしろい構図になると私は考えております。一例に過ぎませんけれども、きっと他にもあると思います。

矢野：ありがとうございました。ご質問、ご意見が大変多くて、これをご紹介すると大変なことになってしまうのですけれども、少し議論を今度は報告者の先生方に移しまして、今後、私どものこのプロジェクトを進めていく上でご報告いただいた論旨の論理の延長線でもかまいませんけれども、少しご意見をいただければと思っております。その前に、この点だけは一つ、これだけはというのがございましたら、一件か二件お受けいたしますが、よろしいですか。

松原：一つだけ、多分みなさんが知りたいと思っていることを一つだけ。台湾にあります杜嗣先の墓誌なんですが、ぜひ、やっぱり見てみたいと私もみなさんも思いますね。日本という名前が初めて出てきた現物資料ですので、なぜ見ることができないのかということは、私は若干、葉先生から直に伺っていますが、多分みなさんお聞きになりたいことと思いますので、もしご紹介いただけるならば葉先生になぜ出てこないのかお話いただければと思います。

矢野：葉先生、よろしいですか。大変難しい問題もあるかと思います。差し支え無い範囲で、しかし思い切って踏み込んでいただければ大変ありがたいです。

葉：まず、中々見つからない理由の最も簡単なものですが、今、大陸と台湾との、古物に関する交通というのは非常に制限されています。以上です。

矢野：はい、そういうわけです。確かにですね、文物をめぐります唐の関係、これは表に出してくれれば、その方、多分手が後ろか前かもしれませんけれども、専修大学のプロジェクトの方も、午前中、高橋先生にお話いただきましたように探索、調査に行かれたようでございますし、私どもも試みてはいるんですが、今、葉先生がおっしゃったような理由も一つ、それから、多分そういう個人の収集家の手に渡った物、文化財っていうものは概ね、二度と日の目を見ることはないというのがどうもこの世界のようで、そういう形で個人の手に入ったものは見つかりにくいと、そういったところだと思います。

葉：好事魔多し、とか申します。いいことを追いかけすぎると、邪魔が入ることの一つの例かもしれません。

矢野：大変、意味深長なご指摘でしたけれど、松原先生、そんなところでご了承願えればと思っています。それで、先程申しましたように来年度に向けて、新しいこの大きなテーマは「東アジア世界史と留学生」、このテーマは変わりませんけれども、新たなもう一つ課題を作って来年度に望んで行きたいというふうに考えております。そんなところから、今日、ご報告いただいた先生方に少しご参考にご意見をいただければと思っております。葉先生からお願いできればと思います。

葉：本日は、異なる地域から来られたスピーカーとともにお話しできましたことを非常に光栄に思います。私が専修大学のこのテーマのことで一つ補足したいのは、漢民族はもともと、「天下」という概念をもっとも早く定義した民族であろうと思います。この「天下」という古代の観念は、今のような民族国家、国民国家のような区分けは全くない時代に生まれた概念なので、日本、韓国、中国といった区分けがない、天の下の天子の民であるという考えがあったと思います。まずこれが一点。二点目は、漢民族は漢王朝以降、漢中をめぐる争いを絶え間なく続け、その長安を都にした王朝は、数多くあるわけです。その中で出来上がった漢民族というものは、実は非常に模糊とした概念であります。実際にはどういった血筋によって作られているかというと、ほぼいろんな民族の混血なのです。ですから、皇室の人間とはいえ純粋な、一つの血統でつながっているという観念を用いるのは多分妥当ではない。先程、李白の話も出ましたけれども、皇室の中の特に皇后が漢族以外であった場合がかなり多かったはずですから、混血という事情は中国の唐王朝に至って、当然普遍的に見られた。ですから、外来民族に対して寛容であったというのはあながち不思議なことではないです。ですから、私がいま申し上げました二点から、改めて歴史とい

うものを見直した場合、また違った角度から見ることができるのではないでしょうか。心もまた広がることですし、いくつかの検証、歴史上の論争を引き起こすような現象に対しても、新たな視点というものを持ちうるのではないかと考えております。

矢野：はい、どうもありがとうございました。これは先程の王先生の議論にも若干関わってくることになるわけですけれども。権先生のところで私どものところで設定したテーマと今後の課題に関わるご発言をいただければと思っております。

権：今回のプロジェクトのテーマは、東アジアと留学生というものだと理解しております。留学生と遣唐使と求法僧は東アジアの交流を考える上で、不可分の関係があります。ここで留学生・遣唐使・求法僧というそれぞれ三つの類を一つにまとめることができる概念が、私は「西学」という用語だと思います。この「西学」という概念が日本の歴史上で、その概念として該当するかどうかはよくわかりませんが、少なくともこのプロジェクトでは一つの概念として採用すれば、今後の研究に役立つのではないかと思います。そうすることによって立体的な研究が出来るのではないかと。私、個人的な欲でこういう概念をぜひ採用してくださるようお願いします。

矢野：はい、ありがとうございました。王先生よろしくお願いします。

王：今回のシンポジウムに参加させていただきありがとうございました。これからの研究については、私は二つの面から考えています。一つ目としては、勿論、今回は東アジアを中心としてその留学生の問題を考えていますが、唐王朝から見るとそれは多くの国の中の新羅とか日本との関係ですから、その点から見ると、少なくともユーラシア大陸の中央アジアとかね、東アジアを含んで、もうちょっと視野を広げてその問題を考えれば何か正確な結論が出ると思います。それともう一つは、具体的な問題については、大平先生のように、一人一人の人物、一つ一つの事件に対して正しく研究して、歴史の様子を復元して、この二つの面から研究すれば、いい成果が出てくると思います。以上です。

矢野：ありがとうございました。このプロジェクトは発端が確かにそうした遣唐留学生の問題からスタートしましたけれども、このORC（オープン・リサーチ・センター整備事業）全体としては、東アジア世界全体に視野を広げながら、人物だけではなく、文化、文物のそれぞれの交流史を全体として明らかにしていくというその中で、とりわけ留学生の役割を重視していくということでスタートしてきているわけですけれども、いずれも提言していただいた先生方のご意見、私どもの大きな趣旨には沿っていると思います。

大平：はい、私は権先生の「西学」というご提案に対して一言申し上げなければいけないなと思いますが、その前に今日、本当に勉強になりましたことをまず感謝いたします。その上で、日本の留学生、吉備真備が何を勉強したのかと考えまして、儒教だけではなくて、その他の様々な学

を修めているのですけども、こういう姿は、新羅の遣唐使が何を学んできたかということを考える時のヒントにもしていただけるのだろうなあと思います。その上でなのですが、「西学」というふうに一つに括ってしまうことによって、わかることと、見えにくくなることの両方の側面を持つのではないかと思います。新羅への使いというのは、遣唐使に比べるとあまり評価されてないのではないかと思うのですけども、私はそんなことはないと思っております。どうして華厳教を採用して東大寺大仏を造ろうとしたのか、私は新羅仏教の影響も無視できないと思っております。というのは、報告の中でも話したのですけども、最初の華厳経講説を依頼されたのは、新羅で仏教を学んだ、すなわち新羅の華厳教学を学んだ審祥だったわけです。中国の華厳教学はどうだったのか、それを考えなければいけないのですけれども、それを考える時に一つポイントになるのが依拠した華厳経です。華厳経は2回訳されております。新訳と旧訳があります。新訳の方は、則天武后の時代に80巻本で訳されておりますが、東大寺の大仏開眼供養会では、60巻本の旧訳が使われております。私は昨日、権先生に新羅の華厳教学では、60巻本、80巻本のどちらを基本にしていたでしょうかということを、調べていただけるようにお願いしたのですが、私としては60巻本であることを祈っております。新羅の村落文書というのがあることはみなさんご存知だと思うのですが、正倉院の宝物の中にあります。あの新羅村落文書は何の一部だったかというと、お経を包む帙というものの芯に使われていました。その帙にくるまれていたお経が、華厳論です。つまり、新羅製の華厳論が確かに入ってきてたということです。私は新羅の華厳教学が、日本の大仏造営に大きく影響を及ぼしたのだろうと思ってます。それから先程の審祥の目録もそうです。審祥の目録は高橋明子さんに教えていただいて勉強したのですが、170タイトルのうち42タイトルが外典でありまして、その外典の内容については、高橋明子さんの指導教授、今日もいらっしゃっていますが、蔵中しのぶ先生が分析を進められてるので、早くその結果を公表してくださいとお願いしてるところなのですが、多くは中国の典籍だろうと思います。じゃあ審祥はその中国典籍をどこで手に入れたのかということです。新羅から唐へ回って持ってきたのか、それとも新羅で唐の外典を収集したのかということです。つまり、唐か、唐発新羅着、その文化を遣新羅使達が学んできた可能性があるということです。ですから、「西学」というふうに全部を一絡げにした時に、確かに権先生の提案されたようにわかることはあると思うのですが、じゃあ遣唐使は何を学んでくることが目的だったか、遣新羅使は何を学んでくることが目的だったかということ、これを考えていかなければいけないと思います。そのためにも、このプロジェクトは一定の役割をこれからも果たしていくのではないかなと思います。以前、鈴木靖民先生と新羅からの経典の輸入ということで少しお話したことがあるのですが、私は日本の仏教を考える上に、新羅の仏教は絶対によそに置けない、唐の仏教を考える以上に新羅仏教を考える必要があると思っております。ですから、単純に西学というふうに一括りするということについては、さらにその中に、新羅、唐、或いは渤海というふうに、やはりそこは連立していかないといけないだろうと思います。最後に一言、私は一生に一回でいいから吉備真備を扱ってみたいと思っていました。真備ほど、奈良時代の政治の修羅場に名前を出したという人物はいないのですけれども、どんな立場にあっても自分の能力を生かして責任を果たそうとする。私は真備の一生を見て、ああいうふうになりたいと思いました。以上です。

矢野：4人の先生にそれぞれ、このプロジェクトに関する要望等々をいただきました。私どもも今日のシンポジウムを経て、運営委員会をやりまして、来年度に向けてもう一度討議を重ねていきたいと思っておりますけれども、先程お名前が出てまいりました鈴木先生にご感想、ご講評でもいただければと思います。

鈴木　靖民：今回もまた専修大学のこのORCのプロジェクト、個人的にですね、大変有意義なシンポジウムだったと思います。感想はいろいろあるのですが、2年目ですよね。2年目ですから、今壇上の先生方の報告を受け止めると、歴史事実をいわばミクロに考えていくことは、歴史学、或いは考古学ですけれども、もう一つ、そろそろ、うまくいえませんが、カテゴライズ、概念とか定義とかも、一方で新しいものを具体的な一事実に即して打ち出さなければいけないのかなと感じました。それで今日は、新羅、それから日本から留学するという話が中心です。結局唐は、やっぱり、すでに王先生なんかの言葉でいえば、コスモポリタニズム、そういう空気というか雰囲気が漲っていたと、私のオリジナルの意見ではないのですが、思ってます。これ、レッテルを張るのはよくないかもしれませんけど、先程の葉先生が言われていた「天」というのは政治的には帝国であるということ、唐がですね、これが大きいのではないかと思います。帝国はそういうエクスパンションというか、外に拡大する性質をもってますけども、拡大した結果、周りのいろんな国や民族、人々を動かしてるわけで、どういう人が唐に入って、お役人に会ったかというと、軍人達が多いです。蕃将っていいますよね。一例として私が注目してる人に、9世紀の日本の僧円仁が唐の長安に5年近くいたのですが、そこで仲良くなった人に李元佐がいます。この人は新羅人です。新羅人で左右、京は分かれてますけども、一つの京の近衛軍の長官のような役で、それから、国子監、大学の名誉学長のような役と、それから宮内庁の長官のような、そういうことが新羅人に任せられているので、そういうのはどういうことなのか。日本で考えてみれば、蝦夷出身の人はいないのか。地方官にはいると思いますけども、やはり渡来系の人々が奈良時代に活躍する。さっき名前が出てきた袁晋卿などは役人になっています。だから仲麻呂の逆で日本でもそういうことをやっているのは、日本なりの、真似をした小中華というか、帝国、そういう言葉でも解けるなと。でもそのことが必ずしも適切ではないような気もします。突然ですけども、最近、保立道久さんが複合民族国家という概念を『黄金国家』という本で提案していますが、そういうこともちょっと気にしないといけないかなと思ってます。それで、「西学」っていうのは私も求法僧と遣唐使の総説する概念として良いのではないのかというのが、権先生の提案でしたし、今日、権先生に去年お書きになった、韓国の『精神文化研究』107号を頂きました。これは表題が「新羅‘西化’求法僧とその社会」。これに大変詳しく、日本よりずっと遣唐使の数が多いのです。一桁違うのですが、新羅の場合やっぱり特に、仏教の求法僧が凄く多いんですね。唐に学んでる。そういう新羅の、こういう研究成果に学んで、日本のことを考える。或いは、大平さんが言われたように、「西学」だと確かに、日本は背後に唐を見てますけど、唐は十何年に一遍しか遣唐使が行かないですから、限界があるのですが、直接には新羅だとか、渤海との交流ですよね。或いは外交政策のやり取り、往来ですよね。そうすると西学というのはやはり、ちょっと日本史には馴染まないかという感想を抱きました。もう一つは権先生の論文を見て思ったのは、大

平さんの研究、今日のご発表がそうだったのですが、日本の社会とか文化にとって何なのかっていう観点が、留学生を媒介にして明らかにできれば。概念というのは定義するという意味ではなくて、もっといろいろな共通項みたいなことからまず抽出して、それをまとめて総合していくことができるのではないかと思いますが、まだ来年でやっと折り返し地点だそうですので、まずは方向転換みたいなことがあるのかもしれません。ところで、隣にいる河内さんと話したのですが、日本は「西」というとあんまりないですね。聖徳太子の時の隋に送った国書に海西菩薩天子ですか、西の皇帝、そういう例はありますね。それから、遣唐使のことを西海使といいますね。あれは列島の日本列島の西海道のことかと思っていたのですが、どうなのでしょうかね。中国から見ると当然日本のことを海東といってますよね。この辺からちょっと切り込むことができるのかどうかということを思いました。いずれにせよ、ここまできたら、やっぱり東アジアという言葉も広く取らなければいけないような、シルクロードの方まで行ってしまう、もの凄い広がりのあるテーマですよね。でもとりあえず、留学生という、文化とかいろいろなものの媒介者ですね、文化とか、思想も含めて、媒介者をどうするかというのは直接的には課題になっているなと。これは文化人類学の成果があるんですよね。例えばミドルマン（仲介者）という概念で考えるとか。今回の成果を一つの節目にして、またさらに進めていただきたいですし、私自身も勉強させてもらいたいと思っています。どうもありがとうございました。

矢野：どうもありがとうございました。私どもの方も、2年を終えようとしておりまして、5年計画の中では丁度折り返し地点に差し掛かりました。初めは井真成のショックといいますか、半分は喜びで始めたわけですけれども、段々学問的な領域へ、別に井真成が学問ではないというわけではありませんけれども、より広い視野から全体をどう捉え直そうかということで、運営委員会の中でもこれから激論をしていきます。またご案内を差し上げますので、陳腐な方に行ったなんておっしゃらないで、ぜひまたお出かけいただければと思います。本日は以上でございます。ありがとうございました。